

# 喜劇役者たち

井上ひさし



# 喜劇役者たち

井上ひさし

講談社

喜劇役者たち

定価 八八〇円

第1刷発行 昭和55年6月30日

著者 井上ひさし

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

©1980 HISASHI INOUE Printed in Japan

喜劇役者たち 目次

笑う男 5

九八とゲープル 43

ロ、ロ、ロイドかキートンか 91

トンカチの親方 123

いわゆる亭主屋事件について 149

盗む男 171

装帧  
设计  
人

# 喜劇役者たち



笑う男



メトロノームの音を聞くと尻尾を振って唾液を出すよう条件づけられたバウロフの犬と同じように、《喜劇役者》とか《コメディアン》とかいう言葉を脳裏に思い込めると反射的に浅草のストリップ小屋の初日の一回目の芝居のことが、びっくり箱から飛び出してくる人形のように勢いよく、記憶箱の中から噴き出しはじめる。

とりわけあの光景は、郊外の丘の上に建つ孤児院の寢室の窓から大金持の奥様の宝石箱をひっくり返したように眩しい街の夜景を眺めながらなんとなく性器を弄っているうちに突然身体が熱くなり気がつくとな手がべとべとしたもので濡れていて、ああ、これが友だちがよく話している射精というやつかと仰天した中学生時代のある秋の夜や、病院の庶務課に雇われて患者の米代を支払うに行かせられ、ごめんくださいといくら声をかけても出てくる人はいない、ふとみると目の前の金銭登録器の引出しが開いており、なかに札束がひしめき、茫として見えているうちに、善心悪心良心などはまったく関係なく手がひとりでに札束にのびて行き、奥からの人の気配に思わず手を引っこめ、はじめて「ああ、危かった。あと一秒、人の出てくるのがおそかったら、一生、泥棒を稼業にして暮すことになったろう。いまの瞬間が人生の岐路というやつだったのか」と胸をなでおろしたが背中汗で濡れていた二十歳の夏のある正午や、娼婦の部屋を出るときは「ああ、味気ない、砂を噛むような気分だ。もう二度とここへは来ない」と決心したのに下宿へ着くころは「もう一回、行ってこようか」と回れ右、こんなに好きなのはどこかおかしいのではないかと心細くなっ

た二十二歳の春のある夜などと並んで、大形に言えばぼくの原風景といったようなものだ。

そのころのことはこれまでもすこしは書いているが、あの光景については一度も触れたことがないのは、わがことながら不思議である。きつと文章に出来にくい、文字にするとその途端もつとも大切な核のようなものがあるりと抜け出してしまふ、自分の筆の未熟を棚に上げて言えば、そういった性質の光景だからだろう。しかし「笑う男」のことを書こうとするにはあの光景について相当の枚数をさき、できるだけ忠実に描き出さなければならない。あの光景は「笑う男」が笑うときに始まり、笑うときで終るのが常だったのだから。

必ずしも「常に」ではないが、また人によつてはなしはちがってくるが、浅草の作者の脚本の脱稿はおしなべて遅かった。なぜ遅いのか。いまになってみればよくわかる。しかしあのころは理解できなかった。旅館へ原稿を貰いに行くと、作者は、酒瓶片手に机に突つ伏して眠り呆けているか、女の白い腹の上に片手を載せて眠り呆けているか、ヒロポン用注射器を片手に眠り呆けているか、この三つのうちのどれかで、珍しく眠り呆けていないときは、眼を宙に据えて立膝をし、向脛をぼりぼり搔いていた。向脛には爪の痕が無数に走っていて、そのうちのいくつかからは血が滲んでいた。

すでに芝居の題名は決まっている。大道具も小道具も持ち道具も、そして衣裳まで発注済みだ。ということとは、時代設定も、その劇の演じられる場所も、登場人物の数もその性別も、さらには名前もすでに決定しているわけで、あとは登場人物の性格と行動と台詞があればいい。なにが苦しくて向脛を血の吹き出すまで搔いているのだろう。そう考えながら手ぶらで小屋へ帰ったものだが、

いまなら感想は逆になる。なにかも決っていたからこそ作者たちはなんにも書けなかったのだ。なんにも決っていなかったらなんにもかも書けたはずだ。

初日の第一回興行を十二時間後に控えた徹夜稽古がはじまるころ、さすがに原稿が入りはじめる。ただし二枚か三枚である。それはたとえば次のように書いてあった。

『のせていかせて天国へ』

——大股終点物語——

## 第一景

なにか明るい音楽で幕上る。

喫茶店のなか。若いアベックみどりと黒沢が、お茶を飲んでいる。カウンターのなかからマスターがアベックに声をかける。

マスター みどりちゃん、恋人を取りかえちゃったんだってね。

みどり まあいやだ。マスター、ひと聞きが悪いこといわないで。山田さんとはただの顔見知り、一回だけ、夜おそくなったとき交番から家まで送ってもらったことがあるけど。肩を並べて歩いたのはそのときだけよ。

マスター しかし山田巡査はこう言ってたぞ。「みどりさんとぼくは手まで握り合った仲です」っ

て。

みどり あ、あのう、そのとき、犬がとびだしてきたの、野良犬が。それで思わず山田さんの手を……

黒沢（きざ男） みどりさん、手だけだったんでしょね。まさかこんなことまでしたんじゃないでしょね……

ト黒沢はみどりに抱きつこうとする。みどり外して、

みどり ひどいわ、黒沢さん。わたし、そんな女じゃなくなつてよ。

マスター まあ、とにかく山田さんには氣をつけるんだな。彼、みどりちゃんに失恋して、夢も希望もはやない、強く正しく生きて行くのはつまらない、っていうので警察をやめたよ。

みどり ええっ。（ト思い入れる）

マスター そして、ギャングの用心棒になっちゃったらしい。

みどり まあ。

マスター ところで黒沢さんのお仕事は？

黒沢 タマゴです。

マスター タマゴ？

黒沢 医者……。

マスター　なんだ、そうか。

黒沢　婦人科なんです。そう、こんな風に診<sup>み</sup>るんです。(みどりに突然) きみ、スカートを脱いでそこへ横になりたまえ。

みどり　は、はい、先生。

トみどり、つい乗せられてスカートを脱ごうとする。このとき、ドアがぱたんとあいて、サングラスに革ジャンパーの男・山田が飛び込んでくる。

山田　この売女<sup>ばいた</sup>！　こんなまっ昼間からなんて真似を。(トみどりを叩く)

黒沢　き、きみ、なにをするんです。

山田　すっこんでろ！

黒沢　ぼくはこう見えても柔道三級ですよ。

山田　おれは三段よ。

黒沢　じゃ、じゃアすっこんでます。

山田　みたか、みどり。この野郎は自分の恋人が他の男にひっぱたかれてるのに、すっこんじまうような意気地なしなんだぜ。そんな男のどこがいいんだよ。

みどり　山田さん、許して。これには深いわけがあるのよ。(ト泣く)

(つづく)

みどりにどんな深いわけがあるのか一向にわからないまま稽古が重ねられる。だが観音様の屋根の向うの空が白らみはじめるころになっても作者からは原稿が入らない。旅館に電話して作者にたずねてみる。作者の答はこうだった。

「だからいま、みどりのわけがどういうわけなのか、こっちも考えているところなんだよ。なにがいいわけがないかね。だいたいね、こんどの脚本は西部劇で行きたかったんだ。激しいストーリーだからさ、日本が舞台ではどうもすべてが嘘になる。しかし、セットも衣裳も決ってしまっているし、もうどうにもならんね」

さっぱり要領を得ない。そこで役者と文芸部とで、みどりという登場人物の「わけさがし」がはじまる。

甲なる役者は論ずる。

「復讐ばなしで行こうよ。黒沢の父親も婦人科の医者なんだ。あるとき、この医者が酒に酔って手術をし、みどりの母親を死なせてしまう。みどりはこれを知って、息子の黒沢を、身体を張ってめっちゃめちゃにしてしまおうと決心する。梅毒患者を探し、これと性交して故意に梅毒にかかり、その梅毒を黒沢に移す、という計画。梅毒で迫力がなければ蠟燭病でもいいぞ、ほら、ちんぽが溶けるってやつ」

乙なる役者は反駁する。

「いまだき、母親の仇討をしようだなんて若い女がいるもんか。それに酒に酔って手術はちょっと

まずいぜ」

甲は再論する。

「いつそ宝探しで行っちゃおう。みどりの家に伝わる九谷の大皿、これと黒沢の家に伝わる九谷の小皿、このふたつの皿を合わせると宝の埋蔵場所がわかる。そこでみどりは小皿を手に入れるために、黒沢に近づく……」

乙は再度反駁する。

「おい、これは現代劇だよ、時代ものじゃないんだ」

丙が言う。

「どうせおれたちのやるのは喜劇なんだからさ、もっとこのパートと、パートと明るくやろうよ。みどりちゃんには深いわけなんかありやしない。ただ、おまわりさんより医者さんの方がいいわ、と目移りしただけ。でも最後には、職業に貴賤なし、お金よりもなによりも、ほんとに自分を愛してくれている山田さんのほうがすてき、って抱きつくところで幕。ね、できたでしょ」

丁は、ただ居眠している。

丙のアイデアが採用され、段取りが決められる。がしかし、これはいつてみれば気休めのようなもので、午前十一時三十分、睡眠不足と芝居の先行きに不安を抱く幕内全員の気持を象徴するように緞帳がふらふらと頼りなく、早くなったり遅くなったりむらつきのある調子で引き上げられると、そのときから、あらゆる段取り、すべての約束事は反故になり打ち捨てられる。観客の目に曝された途端、喜劇役者たちはそれぞれ人が変わってしまい、たがいに相手を喰って喰いまくろうとす

るからだ。この一時間、ときには一時間三十分にもわたるすさまじい喰い合い、それがあの光景なのである。

その喰い合いはどう展開されるのか。前掲の台本を例にとって記せば次のような具合になる。

山田に扮した役者に「すっこんでろ」と一喝された、黒沢に扮した役者は大人しく引っ込んでない。わずかの間でも他人に主役面<sup>づ</sup>されるのはいやだし、不安なのだ。脚本がきちんと在<sup>あ</sup>ってそこに自分の役がきっちり書き込まれているならば、

(こここのところの芝居は全部、山田に扮している役者に譲ってやれ。そのかわり、第一景の後半はおれの見せ場が多い、あそこでばっちり目立ってやろう)

という計算は立てられる。未来<sup>きまい</sup>の保証はある。しかし脚本が存在しない現在<sup>いま</sup>、いくつかの口約束はあるものの、一寸先は闇、一切が不確定だ。ここで主導権を他人に渡してしまうと一生浮び上れないのではないか。死ぬまで喝采と無縁で終ってしまうのではないか。日蔭の拾い歩きはいやだ。

……

黒沢に扮した役者は、突然、ポケットからピストルを抜き出し、山田に扮した役者の左胸に向けて射つ。脚本にピストル発射という指定のあるときは、引き金を引く身振りに合わせて舞台袖の進行係が引玉を引っぱって音を出す。が、このときはむろん音は期待できないから、口で、へばーんぐと叫ぶ。いきなりピストルで射たれた山田に扮した役者はさすがにしばらく呆然となっている。それへ黒沢に扮した役者が引導を渡す。

「みどりさん、ぼくはあなたを守るためとはいえ、彼の心臓にピストルを射ちこんでしまいまし